

- ◎「青山高原に行こう 簡単に 山に登って ロッジでいっぱい飲んで 泊まろう」というお誘いを受けやってやって来た。青山高原は三重県にあるぐらいいし知らなかったが、三宅さんが住む、南山城村とそう離れていないと車を走らせながら思った。縁が少ない名阪国道だが、伊賀上野を過ぎたあたりで高速を降りた。
- ◎最初の予定では、三嶺山だったが、「もっと軽い山」ということで、ロッジのそばの笠取山だという、「簡単なハイキング」だという。最初は、7時に八尾の久宝寺駅集合となっていたので、「5時代の電車に乗らねば」と思っていたが、三嶺山から簡単山に変更になり、久宝寺集合が9時になった。車を出してくれるひとりが体調を崩したので、急遽、車を出してくれと言われた。
- ◎オレより十歳若い男の方が、血圧が200になり急救急車を呼んで病院に行ったそうだ。オレも2年前ぐらいから血圧を下げる薬を飲んでいる。「130以下に 保てるよう」ということらしいが、毎月クリニックで計るだけで数字は知らない。医者が何も言わないので、初心者用の0.25MGの降下剤を飲み続けている。
- ◎「この樹は りょうぶ だ」という。いつも山の中で見かける幹だけけど、夏椿：沙羅双樹ではなく、りょうぶ、というそうだ。サルスベリと呼ぶ地方もあるそうだ。
- ◎「え 馬酔木：アセビ これが」これまたよく見る気で、春に白い花を咲かせている。樹皮はこれまた一皮むけ独特である。葉に毒があり、馬でもこれを食らうとふらふらするというらしい。
- ◎「石破が総理大臣になったらいい 総裁選に勝利したらいい」「石破はアカン 高市を押していた 石破が勝ったので 株が暴落した」苦手な政治と経済の話、なにがどうなっているのか知らないけれど、巷の喧騒がこんな山の中まで聞こえてくる。
- ◎風力発電の風車がいくつか立っているが、プロペラが回っていない。常時回っているものだと思っていたが、こんな山の上でも回転ゼロでは、発電量ゼロ、あまり頼りにならない代物かも知れないね。ネット先生談：海洋風力発電の量が、原子力、火力、水力などより大きいとは知らなかった。メリット・デメリットがあるらしいが、これからの延びていく分野だという。
- ◎我が家のオムロン体重計、なんと昨日は51歳になっていた。春はずっと47歳、たまに46歳もあった。去年も、山の登りがしんどいと思ったころは、52歳ぐらいだった。夏が過ぎ、水を飲まなくなって、体重が67キロぐらいに安定したころオムロン年齢も47歳で安定し山も快適に歩けた。今は70キロ近い体重を3キロ減らし、もとの快適な身体に戻さねばと思い始め、奮闘中である。
- ◎青山の別荘地の中にあるロッジで泊まった。男6、女5、平均年齢は75歳ぐらいかな。まるで老人会ではあるが、皆さん山に登る人たち、簡単な山とは言え、笠取山への往復を簡単にこなし、「さあ シャワーを浴びて宴会だ」というわけである。
- ◎ビールで乾杯、簡単山とはいえ汗をかいての山登りのあとのビールは美味しい。ただ、見ていると、昔のオレのまわりの酒飲み連中に比べ、皆さん酒量が少ないのには驚いた、どうもオレがまだまだ一番の呑み助かな。「肉を焼こう これは わさびが美味しい」ステーキの暑さの肉がいくつか出てきた。肉の味がわからないオレ、肉の部位を言われても何とも返事のしようがないが、美味しく食った。「やはり あかんね この肉は せっかく わさびなのに・・・」喰い慣れている方の一言が聞こえたが、オレは美味しいと思ったが。
- ◎豚肉が出て、鶏肉が出て、野菜が出て、サンマまでいただいた。カラオケセットがあって、大きな声で歌もうたった。
- ◎久しぶりに三瀬さんのところのヒカリホームに、千鳥屋の饅頭を持って行ったが、「他所に移られた 個人情報で なにも 教えられない」とのことだった。オレより10歳上なので、もう90歳近い、2年近く経ったので、「お亡くなりになりました」でなくてよかった。ま、これで、縁が切れたかな。

近江国安義橋鬼噺人語第十三くあふみのくに あぎのはしの おにひとをくらふ こと>

◎今は昔、近江国〇〇の〇〇という人が在国中、ある日、国司の館に元気な若者たちが集まって、昔の話、今の話に花を咲かせ、碁や双六を打ち、いろいろと遊んだり、飲み食いをしていた。その折一人の男が、「この国にある安義橋という橋は、昔は、人が通っていたが、どんな言い伝えがあるのか、無事通りおおせた者がいないという噂が広まって、今は誰も通るものがないになっている」と言い出したところ、その場にいたお調子者の、なかなか口達者で、腕に覚えのある男が、その安義橋の話信じようとしなかったのか、「オレならその橋を渡ってやるぞ。どんな恐ろしい鬼だろうと、このお館第一の鹿毛（かげ）に乗りさえすれば、渡れることがあるものか」といった。

◎「こんな大変なこと こんな恐ろしいこと こんな勇気がいること お前はできないだろう」

「できる できるわい こんなことぐらい」

「なら やってみろ」「やってやろうじゃねえか」

あまり勇気のないオレであったが、幼少時代に悪ガキにはやし立てられ、やってしまった覚えがある。やったといってもたいした事でもなく、ごく他愛のないものであった。

◎この説話は、雑談の席上の話題が契機となって、新しい事件の発生、展開、結末と進む説話構造は典型的なものの、常套手段だったようだ。

◎この話は、雑談の席上で、「こんな恐ろしいことは いくらお前でも できないだろう」「なに お やってやろうじゃねえか」以前から鬼が出るということで畏れられている場所に、主人公は馬に乗って通過する。

おそろしや おそろしや、とその橋を通過していった。

途中で美しい女がいた、「待ってくれ 連れて帰ってくれ」それを振り切って駿馬で駆け抜けた。姿を現した鬼が追いかけるが、逃げ切った。鬼は、「このままではすまないぞ」と捨て台詞。

その後、男の家にお告げがあった。陰陽師によると、「〇〇日 嚴重に物忌みせよ 人に会ってはならない」

主人公は、〇〇日、嚴重に物忌みしていたが、弟が遠方から帰ってきた。仕方なく招き入れ話をしていたが突然取っ組み合いが始まり、主人公は殺された。殺した弟の顔は、「このままではすまないぞ」と叫んだ鬼だった。

◎あれが鬼だなと思うにつけ、気もそぞろにみると、なよやかな薄紫に濃い紫の単衣を重ね、紅の袴を長やかにはいて、手で口を覆いなんとも悩ましげなまなざしをしている女がいた。ことらをちょっと見やった様子も哀れげである。自分からそこに来たのではなく誰かに置き去りにされた様子で、橋の欄干によりかかっていたが、人の姿を見て、恥ずかしいものの、うれしく思っている様子である。男はこれを見ると、すっかり前後の見境がなくなり、馬から飛び降り、抱き乗せて行こうかと、思うほど愛しい気がした。

◎「やはり鬼だったのか」と思い、「観音様お助けください」と念じて、驚くほどの駿馬に鞭打って疾駆すると、鬼は走りかかり、馬の尻に手をかけ手をかけ引き止めようとしたが、油が塗ってあるので、引き外し引き外しして、どうしてもつかまえることができなかった。

男は馬を走らせながら後ろを振り向くと、顔は朱色で、円座のように大きく、目がひとつ付いている。丈は九尺ばかりで、手指は三本、爪は五寸ほどもあって刀のよう。身体は緑青色をして、目は琥珀のごとくである。頭髪は蓬（よもぎ）のように乱れており、見たとたん肝がつぶれ、言いようのない恐怖に襲われた。

鬼は、「よしよし たとえどうあろうと いつか捕えずにおくものか」

◎今昔物語集を読んでいて、今、気になっているのは、鬼やら天狗やら、狐に妖怪のこと。今でこそ昔の話、現代ではそんな馬鹿なことはない、話として聞いておこう、とは思っていない。具体的に、鬼や天狗やキツネは居ないけれど、それに代わりオレの中には存在する何かがある。これは靈感少年の弁かな。いずれにしろ、どっちでもいい、どうでもいい、これらを楽しもう。

◎いつも行く安威川河原、その傍に接して大きな下水処理場がある。そこにキツネがいる、ほんまモノのキツネである。こんな大都会にも彼らは生きていたんだねえ。

◎古事記では、夢のお告げやら、占いやらで、大事なこと政治のこと経済のことを決めていたとやら、不思議なことがあったのだと。わけのわからないこと、説明がつかないこと、かつてにそっちに連れていかれる、そういう時は何かにすがりたい、助けてエ、どっちがいいの決めてえ、これもよくあることだ。

◎近所のポンポン山に登山道に、天狗の休憩場所だったというでっかい杉の樹がある、幹にはしめ縄が巻かれ祠まである。天狗は愛宕山からどこかに飛んでいくときに、この樹の上で休憩したという。天狗は空を飛び回り、人とも接触して、怖いもので、頼もしいものだった。クラマ天狗を見ろ。

◎天狗は鼻が長いだけだと思っていたら、修験者の装束をつけ、空を飛び、山を駆けまわり、ということは古代の鉱山従事者かなともいう。

◎図書館で借りていた民俗学の本の中に、山師の話が出ていたのを思い出す。真っ赤に輝く硫化水銀の鉱山、金、銀などの鉱山、砂金砂鉄など川から掬い上げる金属類、こういう鉱脈や坑道を探し求めて山を歩く人種、天狗のように足早に山を駆け、時には村の住民を傷つけ騙し歩いていた。定住民族の良民たちは彼らをそんなふうに見ていたのかな。

◎古事記で天孫降臨の折、道案内をした猿田彦は天狗だったのかな。

◎天狗は口承伝承や民間文芸で鬼と同様多く語られてきた。赤い顔で鼻が長く、山伏姿、高下駄、手には団扇を持つイメージが有名。また烏天狗は鷲鼻で羽をもつ。

◎鬼とは角が生えぎよろ目で金棒を振り回す赤鬼青鬼を思い浮かべる。

平安時代には、陰陽道に基づく“夜行日”に出歩くと鬼軍団：百鬼に襲われるとされていた。

出雲風土記では、目一つの鬼が田を耕していた、人を食べた、と出ている。

1172年、伊豆国に、「鬼形者：ぎぎょうのもの：が船でやって来た」言葉が通じず、紛争が起こり、島民に被害を与え、船で去った。鬼ではなく、蛭螻であろう、と記されている。

酒吞童子（烏帽子をかぶらず髪を垂らした大人でも童子と呼ばれた）呪的な能力を持つものを畏敬の念をもって、鬼と結び付けられた。昼間は大きな童子で、夜は鬼になった。民俗学の先生は、鉱山主であって、京の都の人たちからは羨望されていたのではという。

女性が鬼：仏教は女性差別の感が。仏道修行の能力欠如、淫乱で嫉妬深いなど劣悪である。ほんまかいな。吉備団子の鬼退治、大和朝廷に逆らう一族が鬼であり、

◎家人が、「キツネに騙され あっちゃこっちゃ うろろうさせられ 家に帰られなかった」と真顔で言っていた。知覚神経がその場所で崩れたのか、「わたしゃ どこにいる いまどこ」なんて幻想的な空間に放り込まれるのかな。エラそうなことを言うオレだが、多少は知っている場所で、前後左右が飛んでしまうことがある。何日か前、JR高槻駅でバスを降り阪急高槻駅に向かって歩こうとして、前後左右が飛んでしまい泡を喰った。狐は昔からお稲荷さんとして、神として祀られ大事にされる反面、人をだます悪い奴の役も演じてきた。カラスも今は嫌われ者だが、一昔前の昔話では、村人に好かれ、童謡にも歌われていたねえ。

- ◎9 時前に林道終点の駐車場にやって来た。まだポツリぽつり降っている、車の道中ではワイパーを回しっぱなし、「今日は午前中雨が残るが、登るころには晴れてくるんじゃないかとぼやきながら走った。「ええい 出発だ」雨具の上下、ザックカバーを付け歩き始めた。
- ◎40 分ほど歩いたところから登山道。駐車場からこの登山口までがいつも厄介。というのはかつての舗装道路がまったく崩れ、膝ぐらいにえぐれ、鉄骨が出ている部分、細いコンクリートが残っているだけの部分と歩きにくい。冬になると流れが凍結に変わり、すってんころりん、危険な道である。オレも今年の雪積期、思いっきりひっくり返り腰を打ちつけた、なんともなくてよかったが。
- ◎「駐車場からすぐに 鉄階段があり それを登っていく」Kさんという方の話で、薊岳への乗越に向かう道があるという、それをちょっと見てみたいと探すと、すぐに階段があり、それを登ると赤いテープが所々に付いている。「おお これだな 急登だ 次回また」とはしごを降りた。
- ◎昼飯はと聞くと、Mさんはトリ飯とにら玉と豪華、Hさんはいつものおにぎり、Nさんはごはんと卵焼き、オレは愛媛の新米をもらったのでそれと野菜炒め、さあ出発である。
- ◎このルートは4回の渡渉がある、ジジイになってくると去年ぐらいから、この渡渉がいささか苦になってきた、おとととなんて言いながら石を踏んでいく、さいわい滑りにくい石なので助かる。それまではなんの苦も無くチョイチョイと渡っていた、ジジイだねえ。
- ◎小雨が降っている、樹林帯の山は薄暗い、先ほどから2.3度道を間違え、「あ そっちの方」「あれれ これは道じゃない」と10Mほど行って引き返した。「岡村さんの 道迷いは 慣れていきますよ」「とほほ」以前もさあ帰ろうと歩き出した。オレは、こっちだと先頭を歩いたが、「大丈夫？」との声に、「大丈夫！」と30分も来て、「これは山の反対側に降りる道だよ」「え ほんとだ」と引き返した。地図の読めない先頭には困ったものだ。「奈良・三重の尾根は、南が、陽のある方が南なんだよ」いかにもである。
- ◎途中で3人の方と出会ったのが一回きりの人のいない山だった。東屋のある開けたところに着いた、少し早いが飯にしまししょうと弁当を広げた。視界50Mの霧が出ている。湯を沸かしコーヒーも飲んだ。「檜塚奥峰はこの霧では 行っても 仕方がないね。飯を終わって荷を置き、乗越まで歩いた。オレはこのあたりの景色が好きだ、草原と立木、白い石と青い苔、白い霧がふわり流れる。
- ◎いずれ薊岳の方にも足を延ばしてみよう。今日のこの天気では動きが取れないね、雨具を着ていたのは、最初の一本ぐらいで、あとは雨も降らずまずはよしとしなくっちゃ。
- ◎オレはバリカンを持っていたので、NさんMさん二人がかりで散髪をしてくれた。帰って見るになかなかの上出来である。
- ◎独図をしてみようと“方位磁石”を1000円で買った。湿度が多いので今日はやめたが、いつの日にかゆっくり地図を見ながら挑戦してみなくっちゃ。
- ◎「昔のように体調が戻ってきた」と三宅さんが言う。「不調は 全部 コロナワクチンのせい」「村に住んでいると ワクチンを受けずに もし感染したら 何を言われるか そりゃあ 村八分に」オレはこのワクチンを3回受けたが、ほかの方々はもっとの回数を受けている。5回、次の6回と受けた方も知っている。コロナ禍はもう過去のものだと思っているが、いまだに過半数の方がマスクをしている。絵の教室の講座をいくつか教えに行っているが、ここでも過半数の方がマスクをしている。「別嬪さん 顔見せて」といいたくなるね。ジジイになって、体調がいい、元気だ、ということが快適で楽しみだ。オレも夏の疲れがまだ完全に回復していない、気力体力が増してこないと人生は黄昏である。
- ◎四回目の渡渉が終わり登山口が見えてきた。登山口は明るい、下る道中、まだ2時ぐらいなのにまもなく日が暮れると思わせるようにうす暗く、湿度の多い空気、ざわざわ水の流れる音、アップダウンの川筋の道を下った。滑り落ちると恐いね、水にはまると嫌だね、昔はまったく意識しなかった川筋の道、去年ぐらいから川筋谷筋の道はなるべく避けようと思うようになった。

備中国賀陽良藤為狐夫得観音助語第十七（巻16）びちうのくに かやのよしひぢ きつねの をうととなりて
くわんおむの たすけをうくる こと

◎人間と狐の婚姻。“善家秘記”“扶桑略記”これらが原拠なのか・・・。今昔氏はありがたい観音様が助けてくれるとしているが、構成といい題材といい、まことに面白い話の発見である。

◎今は昔、備中の国賀陽郡〇〇に良藤という人がおった。金貸しをして家は豊かであったが、生まれつき多情で女好きであった。

妻が上京して、良藤ひとりで家にやもめ暮らしをしていたが、ある夕暮れ、外に出て辺りをぶらぶら散歩していると、突然美しい若い女が目についた。まだ見たこともない美女だったので、むらむらと欲情が生じなんとかものにしてやろうと近づいた。すると女は逃げるようなそぶりをしたので、良藤は歩み寄り女の手を捕らえ、

「あなたはどうか方です」ときくと、女は身のこなしもあでやかに、

「名前など申しあげるほどの者ではございませんわ」と答える。

その様子はえらく魅惑的だ。そこで良藤は

「さあ わたしの家へいらっしゃい」というと女は、

「それはいけませんわ」

「ではあなたのお住まいはどこ わたしがお送りしましょう」「すぐ近くですわ」

良藤は女の手を取ったまま歩いていくと、ほんの近くにりっぱな構えをした家があり、なかを見るとなかなか感じがよく、良藤はこれを見て、

「はて こんな家があったかしら」と思っていると、家の中は上中下さまざまの男女が居て、

「お姫様がお戻りになった」と口々に大騒ぎする。

「さては女はこの家の娘だったのか」と思うとうれしくなり、その夜、この女と契った。

翌朝、この家の主人らしい人が出てきて、良藤にむかい、

「しかるべきご縁があつて かようにおいでくださったのでございましょう もうこのままお留まりください」といって、居心地よくもてなしてくれた。そのうち、良藤はこの女にすっかり情が移り、末永い夫婦の契りを交わして、起居を共にしながら毎日を過ごす世になり、我が家のこと、子ども達のことには忘れてしまった。年月が経ち、妻が身ごもり、子を産み落とし、年月がひたすら流れた。

◎さあ、ここまでは女好きのオヤジが、女房の留守にいい女を見つけ、口説き落として関係を持つ、女の一族もそのおやじを歓迎して女の所に居つく、月日が経ち、身籠り子をなし、もとの家も女房のこともすっかり忘れていた。こういう話は現代でも、あちらこちらで聞く話、みっともないスキャンダル話である。

◎良藤のところに、突然ひとりの俗人（実は観音様）が杖を突いてやってきた。主人をはじめ家の者はこれを見て、言いようもなく恐れおののき、みな逃げて行ってしまった。俗人は良藤の背を突き外に押し出した。

◎良藤の一族は突然いなくなった良藤を探しまわっていた。突然いなくなった彼が表れない、ならば亡骸だけでもと嘆いていた。そんな時に床下からもぞもぞ怪しげな黒いサルのようなものが出てきた。

「なんだこれは」「わした」声を聞けば良藤である。

◎良藤は失踪した時に着ていた着物のままだった。人を床下に入れて調べさせると、たくさんのキツネがサツとちりぢりに逃げ去った。なんと良藤はキツネに化かされていた。良藤は十三年も経ったと思ったが、実際は十三日間だった。

狐変女形値播磨安高語第三十八<27 巻：きつね をむなのかたち にへんじて はりまのやすたか にあふこと>

◎今は昔、播磨安高という近衛舎人がおった。右近将監（うこんのじょう：役人）真正の子である。法興院：藤原兼家の御隨身であったが、それがまだ若いころのこと、殿が内裏においでになっている間、安高も内裏で控えていたが、自分の家が西の京にあったので、そこに行ってこようと思った。

だが、従者の姿が見当たらなかったのも、ただ一人で内野通りを通っていくと、ちょうど九月二十日のころのこととて、月がたいそう明るい。

◎夜更けて、宴の松原あたりまで来ると、前方を濃い紫のよく打ってつやを出した裃に紫苑色の綾織りの裃を重ね着した女の童が歩いていたが、月の光に〇〇て、その姿といいその髪の様子といい、言いようもなく素晴らしい。

安高は長い沓を履いていたが、ごそごそ音を立てながら追いつき、並んで歩きながら見ると、絵を描いた扇で顔を隠していて、よくも見せない。額や頬の辺りに一筋二筋髪の毛の乱れかかった様子は、なんとも言えず魅力的である。

そこで、安高は近寄り、その手を取ろうとすると、衣にたきしめた香がさっとかおってきた。「こんな夜更けに あなたはどちらの方で どこへおいでなのですか」と安高が問いかけると、女は

「人に呼ばれて西ノ京に参ります」と答える。

「人のところへいらっしゃるより さあ この私の家へおいでくださいよ」と安高が言うと、女は笑い声で、

「あなたがどなたかともわからないのに」と答える様子がひどくかわいい。

こうして互いに話し合っていくうち、近衛の御門のうちに歩みは入った。

◎その時、安高はふと気が付いた。

「豊楽院の中に人を化かす狐がいると聞いている。もしやこの女がそれではないか。こいつを脅して試してみよう。顔を全然見せないのがなにやら怪しい」

「本当は俺は追剥だ その着ているものをよこせ」

氷のような刀を抜き、女に突きつけ、

「喉笛かき切ってくれよう その着物を出せ」

女は言いようもなく臭い小便を前にさっとはひっかけた。女はたちまちキツネの姿になり、門から走り出て、こんこんと鳴きながら、大宮大路を来たに逃げ去った。

◎安高はこれを見て、「もしかしたら本当に人間かも知れぬと思って殺さなかったが、こうとわかっていたら、必ず殺したろうに」と腹立たしくも悔しくも思われたが、すでに後の祭りであった。

◎キツネが人を化かそうとしている所を障子の隙間から覗いていたつもりが、キツネに化かされ、牛の陰部を開いて覗いていた。

◎キツネが女に化ける時は2匹で化ける。陰部は1匹のキツネの口で、この女と交わると男根に歯の跡が着く。女が山小屋で陰部を出して寝ている時に、虫が飛び込んできて、虫を喰ったのでキツネとわかった。

◎肥溜めの中に風呂のつもりで入れられた。キツネに騙された。

◎キツネに化かされる人は、あまりに利口か、利口でない人。中ぐらいの人は騙されない。

◎稲作が盛んになり害獣のネズミが増えた。オオカミやキツネがネズミを捕食した。

- ◎朝の9時半に河原に来ている。「なんで こんな 時間に」「いやあ 午後から 降るらしい スマホの予報では 9時から 雨マークが」今朝も、6時ごろ起きて洗濯機を回し、「天気は？」とスマホを見るに、「まもなく 雨マーク」と出ていたので、洗濯ものは2階のアトリエに干した。ただそとを見やると青空で陽が差している、「これで ほんとうに 降るのか な」と怪しみながらも、最近の天気予報は妙に当たりだしたと認めている。昔は、「台風 直撃なら 降るけど その前後は晴れた」と思い込んでいた。最近の予報は、「台風などの 異常気象でも 妙に当たる」と思い感心している。
- ◎午前中だが思い切って河原にやって来た、空は9割がた白い雲が覆っているが、お陽さんがちょうど、うまいことに青空部分にあって、河原の土手の上も水の流れる川面も晴れている。今も気象庁のサイトを見ると、本日は関東地方も夏日だそうで、30度を超えている。この暑さは、関東東北地方で、異常だそうで、記録的な遅い夏日だとおぬかし。我がアトリエも蒸し蒸し、扇風機を回しながらの作業である。ところが明日から一変、10度も下がって寒いらしい。北海道では初雪も観測されるとか。
- ◎この10日ほどは、北摂つばさ高校の門に自転車を止め、北に向かって土手まで歩く。そこから走り出し、大きな下水処理場の辺りは土手の上を、摂津市のスポーツ公園を、その小さな公園でストレッチをして帰るというコースが続いている。土手の上から川面を見る、緑色のどす黒い水面が白い雲、青い空を写し、立樹を写し、たゆたゆとかすかに流れているのか止まっているのか静かな安威川の流れである。アイガモの群れ、10匹ほどが同じ方向に泳いでいる。一族なのか一家なのか、その10匹は大きさも同じぐらいである。中州にこんもり大きな樹が、その下の方にアオサギが、上の方にシラサギが、ともに下流に向かっていている。あれは寝ているのか休んでいるのかじっとしている、いつもの狩りの体勢ではない。下水を放流するあたり、ほわり、生暖かい匂いがする、そこにはいつも何十羽の水鳥たちが陣取っている。餌が豊富なのか、彼らの集会場所なのか、と近づくと今日は一匹もいない。時間が早いせいなのか、今日は彼らの休日なのか、珍しくも一匹もいない。
- ◎先日、難波さんが、「タンスに 入ったままの 服がある 着ない？ 持って行く」5点ほど見せてもらった。ほとんど新品で、「ちょっと大きいので ちょっと好みが地ぐので」という上衣たち。オレと彼では体の大きさが相当違うので、ほとんどが小さくて着られない。彼は小柄でガリガリ気味、オレは現在70キロ弱175センチまで縮んだとはいえ、人にはでかい男だといわれてきた。布の柄や素材の事、流行の事、好みがこれまた違う、「ううむ これはちょっと オレには あわない」てなことで、一着だけいただいた。それは黒のジャンパーで、「汚れかな」というぐらいに薄い白色でへにゃへにゃと落書きが描いてある。しかもひとつの袖だけ色違い、着ていて、「あれれ これ 色違うじゃん」と気づく程度の色違い。このジャンパーは多分なかなかの高級品と思われる。他の4点もおそらく高級品、有名ブランドではなく、オリジナル高級品か。
- ◎我が家は、カミさんが服好きで好みがるさい、同じように娘もうるさい、二人の好みはまったく違うがそれぞれの意見に固執している。女の人は、「私は この系統はだめ この色はあわない」とはっきりしている。男のオレも彼女らに感化され、生意気にも主張しだし、好みの服を買っている。
- ◎服装で感心するのは、京都に行くとケタイなおやじをたまに見る。着物を着たオヤジはざらにいるが、それより、「おっと ぎょっと」とうならされる粋なオヤジが居るのはさすがの京都である。そのてん同じ古都でも奈良の人たちは不細工だねえ、といいつつ、ごめんちゃい。以前京都駅のホームに、尻をからげた着物姿、しかも刀までもったオヤジが電車を待っていた。撮影所がある街なのか、ガマの油売りなのか、いやいや彼はそれなりに格好良かった、と今も思っている。
- ◎あと自転車まで10分20分のところまで帰ってきたころに、本格的に降り出した。さすが天気予報士、ほんと妙に当たるねえ。家に帰るころには全身ぬれぬれみになっていたが、30度越えの夏日なので風邪は引かない。ただ今日は、小学校の運動会らしく、まだ午前中の10時半だというのに、ぞろぞろ父兄たちが小学校から帰ってくる。途中で中止、「残念だ」「早く終わって助かった」どっちの感想かな。

- ◎今、車は湖西道路 161 号線、マキノ辺りを走っている、朝 5 時前に家を出て、茨木 IC から京都東 IC を通ってきた。道路も 6 時までは空いているのでスイスイ走れた、これなら高速を走ることもなかったかというぐらい早い時間である。秋の初めころから 4 人で、「石徹白から 神鳩の宮避難小屋で 2 泊して 別山へ」という計画を立ち上げたが、2 回流れてしまった。2 回とも天候ではなくて、老体故障という人為的な理由だった。「なら 天気がいい今 ソロでも 行くぞ」と宣言して決行している。おかしな話だが、ソロで行く場合、行くぞと宣言しないと、「むむむ やめとこか」下らぬ悩みから腰砕けになるからである。今回は道路上で徘徊する猿を 3 回見た、車のタイヤで潰されたどんぐりの中身を喰っているのかな、「うろうろしたら 危ないで」である。車に轢かれた 2 匹のタヌキも見た。
- ◎車のナビの使いかたも少しは上手になってきた。このナビ君、フルネームの固有名詞を入れると感知しないが、最初の地名を入れると芋づる式に出てくる。例えば登山口を探すなら、まず“白山”と入れる、芋づるの中に“白山石徹白登山口”があった。
- ◎ナビ君に“白山石徹白登山口”、を入れると、6 本のコースを示してくれる。1 番は名神から東海北陸道：白鳥 IC で降りると出る、4 時間ちょっと。次が新名神、次が北陸道と順次ちょっとずつ時間がかかり、まったく地道だと、6 時間強かかる。今回は、京都東 IC から湖西：161 号線、8 号線、鯖江あたりから大野に抜け、九頭竜街道を走った。九頭竜街道から石徹白に行く道と石徹白から登山口に行く道が共に狭く、対向が苦勞するところが何か所もあった。実際に対向車が来たのは往復で 3 回であった。一回は大型トラックがいた。オレは手前で止まり車を降りて横の草地を見に行った。「これなら オレが 草地に 突っ込める トラック君 どうぞ通って」である。トラックの運ちゃんが丁寧な声をかけてくれた。
- ◎朝倉家遺跡：まだ午前中だったので、止まってみればよかったと反省、帰りも看板があったので遠回りをして見に行った。1573 年織田信長の焼き討ちにあうまで、朝倉家は五代、およそ 100 年栄えた。今その発掘がされ、城、城下街が出てきている。同じく、白山平泉神社：元は白山平泉寺：ここの遺跡も何年か前に見ておおいに感激した。1574 年に一向一揆との戦いに敗れ全山が焼きうちにあった。ここのように発掘され、伽藍の跡が復元しつつある。「裏日本の こんな辺鄙なところが なんて 文明文化が栄え・・・」なんてことはオレの中で死語である。古事記の三浦先生も、「日本海側は 縄文、弥生時代に栄えていた」という。北九州、出雲、越などだ。
- ◎10 時すぎに石徹白登山口に着いてしまった。「12 時過ぎまでには 着きたい」と思い、「京都東まで 高速を利用したが 無駄だったな」と思いつつ、時間を計算した。小屋までのコースタイムは、登り：2 時間半、降り：1 時間半となっている。上下がこんなに違うのはよほど急な斜面のようだ。写真を撮りスケッチをしてゆっくり登った。
- ◎登山届を提出しようとして書いてある。用紙がないのでスケッチブックをちぎって住所氏名名前などを書いて箱に入れた
- ◎10 分ほど急な石コロ階段を上ると“大スギ”と書いてある。「なんだ こんなの さがしゃ 在るじゃないの」と奥を見るとバカでかい奴がある。「おお これはすごい 寿命 1800 年 屋久杉は 見てないけど・・・」調子のいい話をしているけど、ここは、2.3 度来ている。
- ◎時間が早いので何度も休憩した。「あれれ」なんだか甘い香りがする、「え まさか」ウイスキーを入れたペットボトルの栓がボケている。「あちゃあ ワンショットも ないじゃん 山崎だぞ」ザックが、「ごち」と言っている、「あちゃあ くそお」である。
- ◎2 時過ぎに小屋に着いてしまった。「早すぎる することがない・・・」途中でスケッチをしていた、樹の幹やら枝やらを描いていた。スケッチと言っても抽象画、「おまえ なにも ほんまモノの 樹を 見なくてもこれならどこでも 想像して 描けるじゃないの」こんな話は若いころもしていたね。「おまえ わざわざ アメリカに行かなくても パリに行かなくても・・・」「感性の 琴線に 触れるのじゃ ほほほ」

- ◎避難小屋の扉を開くと誰もいない、荷も置いていない、「今のところ 誰もいないんだ さ 水を汲みに・・・」前回、衣川さんと来た時は御岳山が爆発した翌年ぐらい、8年ぐらい前か、「確かここを 下っていく 簡単には 水は 手に 入らない」という記憶があった。水で湿ったへこみを木や草を掴みながら下っていく、10分ぐらいのところにパイプが見えそこからきれいな水がチョロチョロ出ている。500mmのボトルに入れるのに1.2分かかりそうだ。4.5リットル汲んでザックに入れて上にあがった。
- ◎4時頃にあんちゃんが降りてきて一本取っている。「はよ おりんと くらなるよ」それから小屋の中、5時になって夕焼け雲、「もうひとつだねえ」ワンショットを飲んで、コンビニで買った生姜焼弁当を食べた。ダウンの上着を着て、足先にカイロを張り、シラフに潜り込んだ。「明日、ここに泊まらず 降りるか・・・」
「朝4時半に出発 行けるところまで、2時頃にここに 戻って 重い荷を背負って 降りる 10時間行動になるやも」「明日は 車中泊もアリか」「ここで もう 一泊は やだねえ」なんて思いながら寝付いた。
- ◎昨夜は6時頃に寝付き、1時にトイレ、次に4時に起きた。湯を沸かし昨夜作ったアルファーマー米に振りかけをひと袋入れ湯をかけて喰った。一人だと食事もおかしいねえ。40リットルザックを二つ持ってきたので、ひとつをデポ用に、シラフ、コンロ・ボンベ、食料、水などを詰めた。今日の行動はパンと水、雨具とダウン、まだ暗い中ヘッドランプを頼りに出発した。熊よけ鈴も盛んに鳴っている。
- ◎暗い中を登っていく、徐々に明るくなっていくがまだまだ暗い。10M ぐらいの低木樹林帯、まわりは見えない、エンヤコラどっこいしょである。ぼんやり朝日がもうすぐか、ご来光なんていうが、これは興味が無い、昔から見たいとも思わない。皆さんが、ご来光を拝むために、〇時に出発なんて聞くが今までそんなことはしたことがない。
- ◎母御石（ははごいし）：白山信仰の中、僧：泰澄大師が山で修行中、女人禁制のところに母が登って来て命が尽きた。その墓石かな、よくわからない。「おかん 来るな こんな所に 修行中だ」
- ◎右の方、東の空からオレンジ色の太陽が丸くある。「どこがありがたい」なんて悪態をつきながらチラリ見た。暑くなってきて、ダウンを脱ぎ水を飲んだ。パンをひとつ喰った。
- ◎この登山道は1800M ぐらいの標高の尾根道が、ポコリンポコリン上がったたり下ったり、一本二本と進むうちに、「おお 今日は 調子がいいぞお」とゆっくり進む。午前中は晴れる予定だったが、雲が多い、ほとんどの白い雲の中に青空がチラリ覗く。「稜線歩き 悠々漫步 尾根道歩きはいいねえ まわりがまる見え 暑くもない 寒くもない でっかい山々にオレひとり」「風がいい 光がいい 空気が美味しい」オレの目の前を小鳥がビュンビュン横切っていく。小鳥の群れが御岳方面に向かって横切っていく。ちっさい鳥のスピードはすごい。あれれ、別の群れはヒヨドリぐらいの大きさ、これも、ビュンビュンである。
- ◎「よし 夕方までに 車に 帰り着けばいい ゆっくり登ろう」そう決めて、ゆっくり歩いた。ゆっくりのおかげで疲れてこない、まだまだいける、一步一步エンヤコラである。ジジイになると、大きい山はゆっくりだねえ、ゆっくりだと疲れ知らず足が動く。
- ◎道にリンドウが、まだ咲いていない青紫を4個見た。朝は膝上ぐらいの笹が夜露に濡れて、オレのズボンも濡れてきた。スパッツは雪だけじゃないねえ。「さあ ぼちぼち 引き返すか 三の峰が 前に見えるが・・・」
- ◎先程、盛り上がったところ、すってんころりん、見事に上向きひっくり返った。窪みに嵌まり足を振り回した、「起き上がれない」と笑ってしまった。
- ◎1時頃に小屋に着き、デポしていたザックに、担いでいたザックの荷を押し込み、そのザックをひもで結び付けた。やや重いが昨日の登りに比べいくつかの食糧が減っている、エンヤコラ荷を担いで下った。
- ◎車にたどり着き、汗で濡れはものを脱ぎ、タオルで身体を拭いた。乾いた服を出し替えた。湯を沸かしインスタントコーヒーを飲み、パンを齧った。来た時の道をそのまま帰ることにした。またもや朝倉遺跡によった。帰り着いたのは夜の9時頃だった。ビールと目刺しで乾杯である。

伊豆守小野五友目代語：28-27<いづのかみ をののいつともが もくだいのこと>

◎以外にも、人望厚く評判のいい目代が 傀儡子の出身なることがばれた話。身元がばれたのちは、声望がやや落ちたというのも当時の階級、差別意識だろう。しかし、そんな、非人、賤民出身の者が朝廷組織の中で、目代の地位を得、信頼声望も厚く、仕事をこなしていく様子はさすがらしい。

◎「ドラマ、映画は ハッピーエンドじゃないと つまらない」オレも含めそういう意見のヒトなんだけれど、人生が下り坂を駆け抜けるオレとしても、人生が上り坂の話が好きだとは、罪がなくていいねえ。この今昔の目代氏、人望厚くしかも仕事ができる、素晴らしいじゃないのかな。もっともオレが描いている絵は、人にはわからない抽象画を、頑固に、独りよがり、振り返ることもなく、他人を意識することもなく、他人の意見も聞かず、進めている。「そりゃあ 少しは売れたほうがいい そりゃあ 人望厚く しかも人気のある絵を描けりゃ いいに越したことはないが やはり 頑固に 今の オレの絵が いい」

◎目代：平安時代国司が役職上現地に下向して執務しなければならないが、代理人として派遣され代官などの役人。

◎今は昔、小野五友という者がおった。永年外記を務めた功勞で伊豆守になった。

これが伊豆守として任国にいた時のこと、あいにく目代がいなかったので、目代に使うべき者が居ないかと、あちこち求めさせていると、ある人が、駿河の国に なかなか頭がよく 事務の才があり 文字の上手なものがあります」と告げた。

これを聞いた守は、「それはたいそうよさそうな話だ」と言って、わざわざ使いをやって呼び迎えた。

守が見ると、歳は六十ぐらいの男で、たいそう太っていていかにも裕福そうに見えた。笑顔一つ見せず、苦虫を噛み潰したような顔をしているので、これを見た守は、

「心はわからぬが まず見た目は目代としてもってこいのようなだ 風采と言い 言葉づかいと言い なかなか頼もしそうな様子だわい」

どのくらい文字が書けるかと、書かせてみたところ、筆跡はさほど達者ではないが、さらさらと書き流して、目代の筆としてはじゅうぶんである。

事務の腕はどのくらいかと思って、込み入った租税の書類を取り出して、

「計算してみよ」「これこれでございます」

「心はわからぬが 事務能力は相当なものだ」

その後、国の目代として、万事をまかせ、身辺離さず使うようになったが、二年ほど経っても、少しも守の機嫌を損ねる様子は見えない。信用され重く用いられた。隣国まで有能な男として評判になっていた。

ある時、この目代が守の前に座って、何通かの通達書を書かせ、それに判を押させていると、たまたま、傀儡子の一行がたくさん館にやって来て、守の前に並んで歌をうたい笛を吹き、面白く囃し立てる。守はこれを聞いて、我ながら何となく心が浮き立って、面白くなったが、ふと、この目代の判を押している手元を見ると、それまでたいそう神妙に押していたのに、この傀儡子どもの吹き歌う拍子に合わせて、三拍子に判を押している。これを見た守は、おかしいことだと思いながら見守っていると、目代は太ってかっぷくのいい肩まで三拍子にゆすっている。傀儡子どもはこの様子を見て、一段と力を入れて歌い吹き、叩き、急テンポで歌い囃す。と同時に、この目代は太い塩辛声を張り上げ、傀儡子の歌に合わせて歌いだした。目代は、にわかになち上がり走り出て、踊り始めた。

傀儡子目代とあだ名されたが、その後も目代を続けた。

◎最近の日本人は、踊らない、踊れない。身体をゆすってリズムに乗らない、これは残念なことだと思う。